

六甲山系ごろごろ岳

漢人のイワクラ

＜鏡岩・剣岩の考察と秦氏の三柱鳥居＞

会員 江頭 務

1 はじめに

本論文は、荒深道斎氏が六甲山系ごろごろ岳で発見したとされる鏡岩と剣岩について考察し、秦氏の三柱鳥居との類似性から太陽信仰と北辰信仰の習合の象徴としての「漢人の磐座（あやひとのいわくら）」の可能性を示唆するものである。

ここでは、磐座を人為の有無にかかわらず「祈りの対象となつた岩石」と解釈する。古代においては自然そのものが神であり、みだりに聖なる岩を加工したり、組み立てることは神を汚す行為であった。このため、ほとんどの磐座は自然石である。

2 六甲山系ごろごろ岳

六甲山系は阪神間の市街地の背後、西は塩屋から東は宝塚まで、幅10km、長さ約30kmに渡つて連なる細長い山系である。ごろごろ岳は、六甲山系の東、芦屋市の北方に位置する標高565.6m（最新の測量で565.3mに改訂された）の山である。ごろ岳は、昔は剣谷山（けんたに

やま）（文献¹）と呼ばれていたが、標高が「ごろごろ（5656）」であることから、いつしか「ごろごろ岳」と呼ばれるようになった。

「ごろごろ岳は、荒深道斎氏が昭和6年（1931年）に八咫の鏡岩と叢雲の剣岩の磐座を発見したことでも知られている。ごろごろ岳の近くには、荒深氏探査による剣谷・六麓荘磐座群を始めとして（文献²）、縄文時代前期の朝日ヶ丘遺跡、弥生時代中期の会下山（えげのやま）・城山（しろやま）高地性集落遺跡、古墳時代後期の城山三条古墳群・山芦屋古墳・芦屋神社境内古墳・八十塚（やそづか）古墳群等多数の古代遺跡が点在している。

六甲山系は阪神間の市街地の背後、西は塩屋から東は宝塚まで、幅10km、長さ約30kmに渡つて連なる細長い山系である。ごろごろ岳は、六甲山系の東、芦屋市の北方に位置する標高565.6m（最新の測量で565.3mに改訂された）の山である。ごろ岳は、昔は剣谷山（けんたに

3 芦屋の渡来人

古代の氏族の始祖や系譜を記した「新撰姓氏録（しんせんじょうじろく）」によれば、芦屋に渡來人系の豪族である葦屋漢人（あしやのあやひと）の名がある。また、古来、芦屋の浜辺を漢人浜（から

ひとのはま）と呼んでいることから大陸との深い関わりが伺える。（文献³）

城山三条古墳群からは、渡来人に深くかかわるとされるミニチュアの竈形土器、その隣の山芦屋古墳からは百濟系の須恵器壺が多数出土している。（文献⁴）

表1は、渡来人に焦点をあてて作成した古代史年表である。これによると、古墳時代に多くの渡来人がみられる。

4 鏡岩と剣岩の考察

（1）鏡岩の考察
荒深道斎氏は鏡岩に關して、「やたのかがみ」紙上（第122号）にて次のように述べている。

『六甲山の東麓の国有林中に、剣谷と称する一渓谷がありその西方は宮川谷といい、両谷の境をなす峰尾の上に、径十三尺厚さ三尺程度の巨石があつて、その表面を径八尺の円形に削り四隅を小山形に刻んだ一巨石がある。三種の神器の

		中国	
紀元前 3世紀～	弥生時代 (紀元前3～紀元3世紀) ・稻作の開始 ・紀元前2～3世紀、渡来人が日本に定住する。 ・倭人、百余国に分かれ、その一部は前漢楽浪郡と交渉を持つ(漢書地理誌)	-300	戦国時代 秦、楚に大勝する
		-221	秦の始皇帝中国を統一
		-206	秦滅亡
		-202	劉邦前漢を興す
		-108	前漢武帝朝鮮に樂浪郡を設置
		AD8	前漢滅び、新興る
		25	新滅び、後漢興る
		220	後漢滅び、三国時代始まる
		265	魏滅び、西晋興る
3世紀後半	大和・古墳時代始まる。前方後円墳の出現		
4世紀		316	西晋滅び、五胡十六時代始まる
4世紀後半	応神17年(日本書紀) : 秦氏 (はたうじ)の祖先とされる弓月君(ゆづきのきみ)は、加羅から127県の3～4万人の人夫とともに渡来する。土木・農業・養蚕・織機・酒造り・金工などの生産技術をもたらす。		
	応神20年(日本書紀) : 東漢氏 (やまとあやうじー倭漢氏)の祖先とされる阿智使主(あちのおみー阿智王)が百濟から17県の民とともに渡来する。製鉄・織機・須恵器などの生産技術をもたらす。		
5世紀		439	五胡十六時代が終わり、南北朝時代始まる
	倭の五王、南朝に使節を派遣。この頃、朝鮮からの渡来人多し		
462	雄略7年(日本書紀) : 技術者集団である 今來漢人 (いまきのあやひと新たに来た渡来人の意)が百濟から渡来し、東漢氏の配下となる。		
5世紀末～ 6世紀前半	西漢氏 (かわちのあやうじ)が渡来し、河内古市を本拠とする。すでに大和を本拠としていた東漢氏と区別するため「西」を冠したといわれる。応神朝に渡来したとされる王仁の後裔氏族で、西琳寺はその氏寺。		
6～7世紀	任那、百濟、高句麗の亡命者らが多く渡来し、学者・技術者として朝廷に仕える。文字を始め儒学、仏教など高度な精神文化をもたらす。		
		581	南北朝時代が終わり、隋興る
593	推古元年(大和・飛鳥時代)始まる。難波津の全盛期、渡来人多し。 四天王寺 の建設が始まる		
7世紀		618	隋滅び、唐興る
7世紀初頭	双ヶ丘一号古墳造営(秦河勝の墓との説有)		
645	大化の革新 蘇我氏滅亡 律令国家のはじまり		
712	古事記完成	712	唐 玄宗皇帝即位

表1 渡来人の古代史年表

八咫鏡のことを知る者なりせば、一見直ちにその八咫鏡を象る鏡石たることを悟り得るのである。』

荒深氏の文章は、鏡のおもて面に円形の飾り縁があるかのような表現であるが、そのような鏡はガラス製の鏡であり、少なくとも古代鏡ではない。従つて、考古学的には古代鏡の裏（背）がもつぱら研究の対象となつてゐる。

石で鏡を模した古代遺物の例として石製鏡（せきせいいかがみ）がある。

ある。

日本考古学用語辞典（斎藤忠著 学生社 1992年刊）によれば、

次のような説明がある。

『石製模造品の一。滑石で鏡を模造したもの。鏡形模造品ともいう。鏡を模造したとされる遺物としては、石製円板にも見られるが、円形で、鏡背に当たる部分の中央に鉢がつくりつけられている。また鏡背には、簡素ながらも一種の文様が内外区に分かれてほどこされたものもある。径10～14cm

ぐらいで、祭祀遺蹟・古墳のいずれにも発見されている。』

八咫鏡については、高橋健自氏の「八咫鏡考」と題する優れた考

古学的論考がある。

その中で、八咫鏡は円鏡にして白銅鏡（下注参照）との指摘がある。（文獻5）

（注）古事記の天の岩屋戸の条に、「天の金山の鉄を取りて鏡を作らせる」との記載があることから、平田篤胤の「八咫鏡鉄鏡説」がある。

また、現在、八咫鏡に近いとさ

れているものとして、福岡県前原市の平原遺跡から出土した日本最大の古代銅鏡である「内向花文鏡」（図1）がある。昭和40年に発見された平原遺跡は、その副葬品の豪華さにより倭王の墓という説もあり、日本一大鏡、太刀、勾玉の三種の神器が出土している。（文献6）

大きな鏡の鏡縁は、鋳造時の湯の回りから平縁や三角縁等の単純形状であると考えられる。従つて、

八咫鏡の鏡縁は単純形状で複雑な形状ではありえない。上記と漢代以前の銅鏡の図録の調査から、石

製・銅製にかかわらず古代鏡は円鏡である言える。

ここで、鏡岩の写真、荒深氏の鏡岩のスケッチ、鏡岩の寸法見取り図を図2、3、4に示す。

鏡岩の寸法見取り図は、鏡岩を不等辺六角形に見立てて測定を実施したものである。これを見ると、

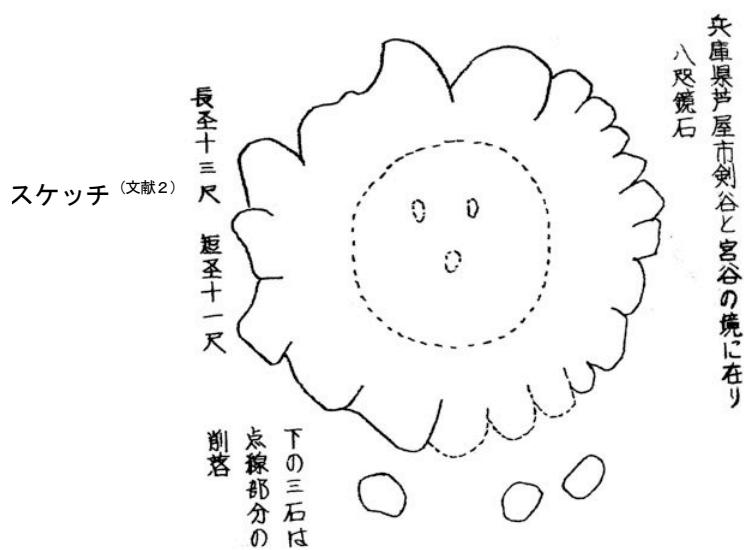
鏡の外形が円からも正多角形からも大きくはずれていることが分かる。このことから、鏡岩は人が鏡を模して製作したものではなく、花崗岩の風化プロセスにより出現した奇岩であると言える。

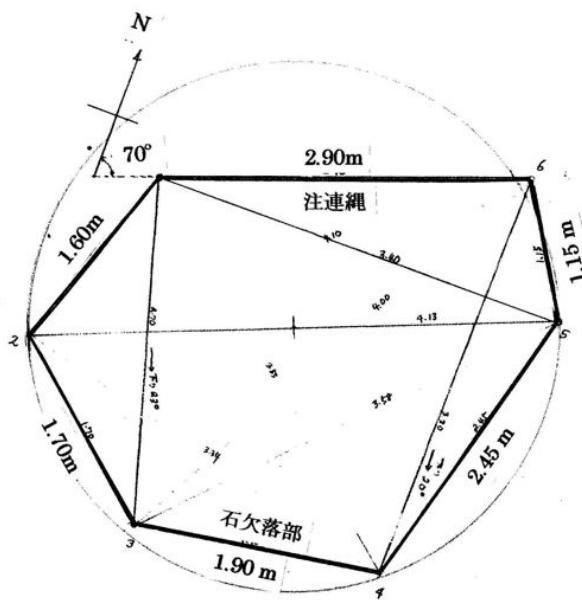
一般的に鏡岩といえば、断層作用により作られた鏡肌を有するチャート等の堅牢緻密な岩をさす。全国の鏡岩を調査したものとして、「鏡岩紀行」林宏著 中日新聞社



の内向花文鏡（文献6） 直径 46.5cm
いわれている伊都国の大鏡

2000年刊があるが、鏡の形状を模した岩は言及されていない。このことは、荒深氏の鏡岩が、全國に類例のない文化財に相当する奇岩であることを示している。





面積9.2m² 厚さ(推定)0.
9m 体積8.3m³ 重量22t o
n(花崗岩の比重2.65)
外形を見る限り荒深氏の鏡岩は古代鏡とは程遠い。ではなぜこれが鏡岩と呼ばれるようになったのか、この謎を解くことが本論文の目的のひとつでもある。

それは、鏡岩の外形ではなく、鏡背に心を奪われたからである。このことは、鏡岩を見る人間に豊富

な鏡の知識があつたことを示している。そのような人々とは、中國大陸の鏡文化の影響を受けた渡来人であることが推定される。そして、岩から受けるイメージから逆に銅鏡を特定することにより、一層具体的な事実が明らかとなる。

この鏡は、鏡縁が図5・6に示すような16個の連弧文で形成された前漢中・後期の鏡(草葉文鏡・星雲鏡)であることがわかつた。

この鏡は、銅鏡全体から見れば少数派に属する鏡である。

鏡岩の鏡背の最大の特徴は、荒深氏の記述のように鏡縁が多数の小山によつて形成されたフリル状のイメージであり、連弧文の鏡縁

が唯一それに該当する。



4世紀後半、応神天皇の時代、葦屋漢人と同族であり阿智王を祖先とする東漢氏（やまとあやうじ）の一部は吉備の地に定住した。帰化するにあたってその帰属意識を明らかにするため日本古来から伝わる磐座を設けたとされ、その磐座が岡山県倉敷市の阿智神社に残されている（図7）。^(文献9)つまり、漢氏は、磐座に深い関心を有していたことがわかる。



たとされる阿智神社（岡山県倉
石）^(文献8)

以上のことから、鏡岩は、前漢文化と深いつながりをもつ朝鮮からの渡来人が自然石を新たな磐座とした可能性が高いことが推定できる。鏡岩の近くの朝日ヶ丘には縄文時代前期の集落跡があり、早くから石の文化が花開いていた。磐座は、この石の文化と渡来人の鏡の文化の融合の産物と考えられる。

（2）剣岩の考察

荒深道斎氏は剣岩に関して、「やたのかがみ」紙上（第122号）にて次のように述べている。

『鏡岩より峰尾をたどりて頂上に至れば、丁度剣谷の直上約五百メートルの点に、菱形の巨石（長径十一尺）が數十個の巨石を積み上げて作られた台座の上に毅然として立っている。石面には天之勇者と称せられるオリオン星座が刻まれて居るところより見ても、これ明

らかに剣石で、剣谷の地名もこれより起りしことは論をまたぬところである。』

剣岩の南に面した岩の面の写真とそれに対応する荒深道斎氏のスケッチ及びオリオン星座を図8～1に示す。

図9の岩の面には、直線状に並んだ三つの窪み（荒深氏の主張するオリオンの帶 2等星）が確認されるが、星座を構成する一等星ベ

テルギウスとリゲルの位置が不明であり、これがオリオン星座であると主張する根拠は薄弱である。また、天体の運行の基準となる北極星は距離的に菱形の岩の面から左下方向に遠くはみだすことになり不自然である。

さらに、荒深氏の磐座探査のバイブルとする古事記においても、オリオン星座と叢雲の剣との関係を説明する明確な記述がない。ただ、大阪の住吉大社の祭神である底筒男命（そこのつをのみこと）、中筒男命（なかつつをのみこと）、

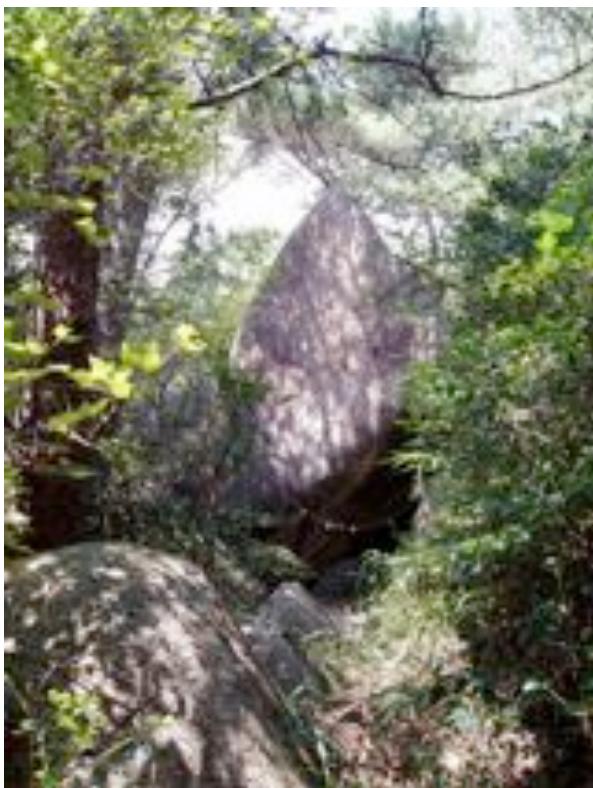
表筒男命（うわつつをのみこと）をオリオン星座の「三つ星」に見立てる説があるが異論もある。^(文献9)

り、大多数は単なる剣岩の名でよばれている。

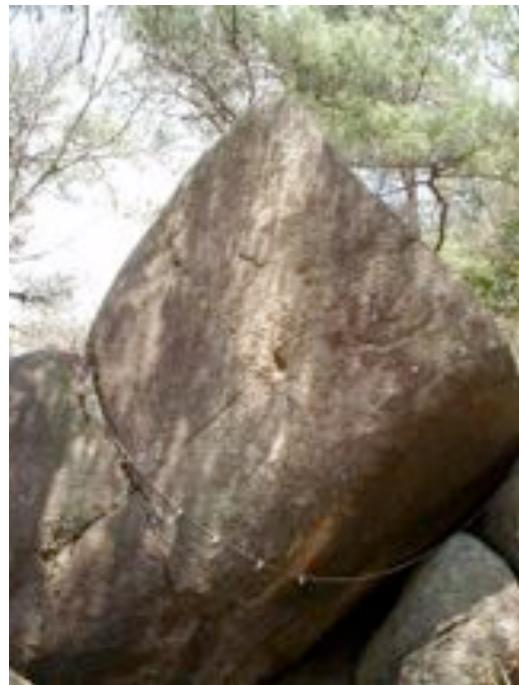
図12は、ごろごろ岳の西隣の荒地山山頂で見つけた剣岩で、花崗岩の風化の一例を示している。

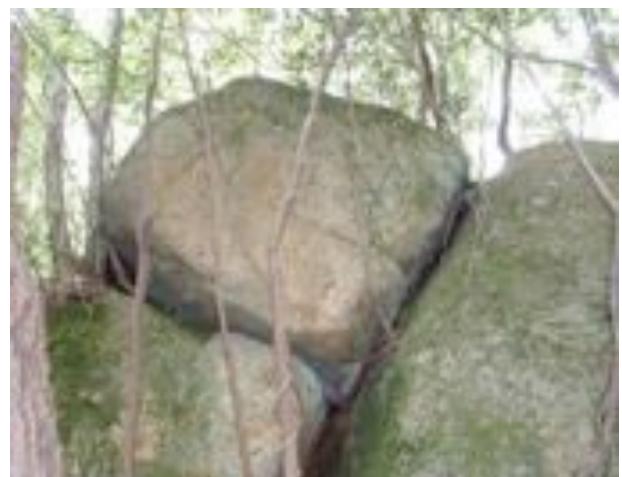
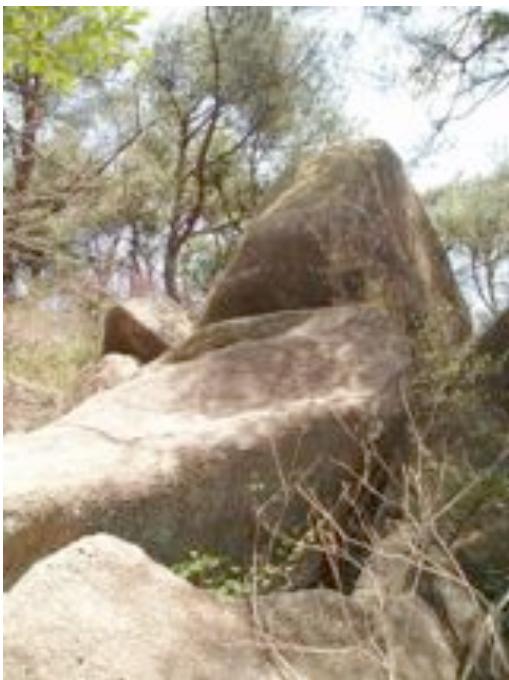
また、図13は、大分市の近郊にある西寒多（さきむた）神社の奥の宮にある磐座である。荒深氏の剣岩と酷似していることから、荒深氏の剣岩も古来からの磐座である可能性が高いと思われる。古代人のみならず我々も含め、このよ

うな神秘的な岩に対し畏敬の念を抱くのは、東洋人の素直な感情の発露といえよう。



3B 剣岩の正
だ穴ぼこが
直縄の掛かって
いるように見え
て下に向かって
も明らかであ





この剣岩が、「叢雲の剣」とか「北斗の剣」等の具体性をより高めるためには、地理、方位、伝承などの新たな条件が加わる必要がある。六甲山と「叢雲の剣」にはこのような関連性が見当たらないのに對し、「北斗の剣」には、後に述べるように剣岩が北方にあり、剣岩全体が東西に細長く展開していること等の条件が整っている。

すなわち、剣岩を「北斗の剣」と見た人々は、鏡岩を磐座とした鏡・道教などの中国文化の影響を受けた人々であると推定される。

5 ピロゴロ岳における磐座の三角配置

方位線は磐座の配置を検討する上で極めて重要である。

今、鏡岩—弁天岩—剣岩を地図上で結ぶとほぼ東西を底辺とした図17のような正三角形になる。ここで、弁天岩は芦屋川上流の芦有ドライブウェー沿いにある古くか

ら良く知られた雨乞い信仰の巨大な岩（図14）で、磐座（文献12）と見なされている。

この弁天岩を古事記の「天の岩屋戸」と想定すると共に、正三角形の図心に、新たに発見した「漢人岩（あやひといわ）」（仮称 図15）を置いたものが「ピロゴロ岳における磐座の三角配置」（図17）である。漢人岩は、江戸幕府（徳川氏）が1620年から1

0年の歳月をかけて再築した大坂城（現在の大坂城）に伴う東六甲採石場の一つにあり、半ば埋もれてひつそりとある。（図15）尚、

漢人岩と鏡岩を結ぶ線上には四天王寺がある。以下、この配置をベースに論を進める。

「ピロゴロ岳における磐座の三角配置とGPS測定結果を表2に示す。

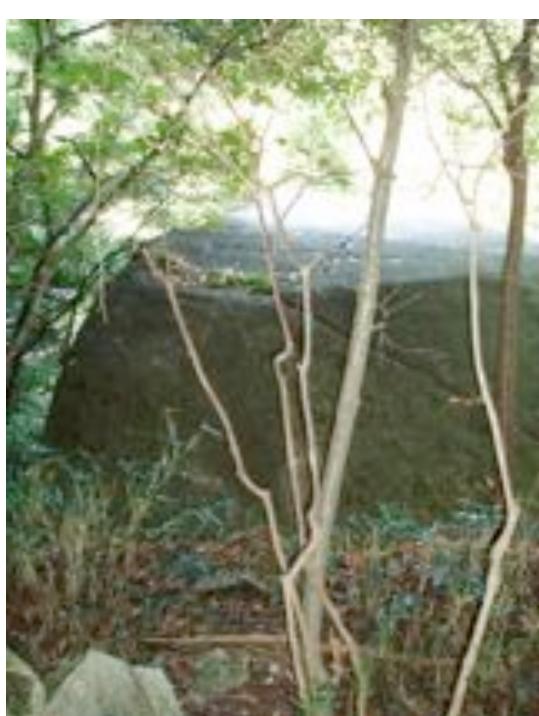
上記の緯度経度を地図上にプロットした結果を図17に示す。

また、その図の説明図、誤差とズレの説明図を図18、19、計算結果を表3に示す。

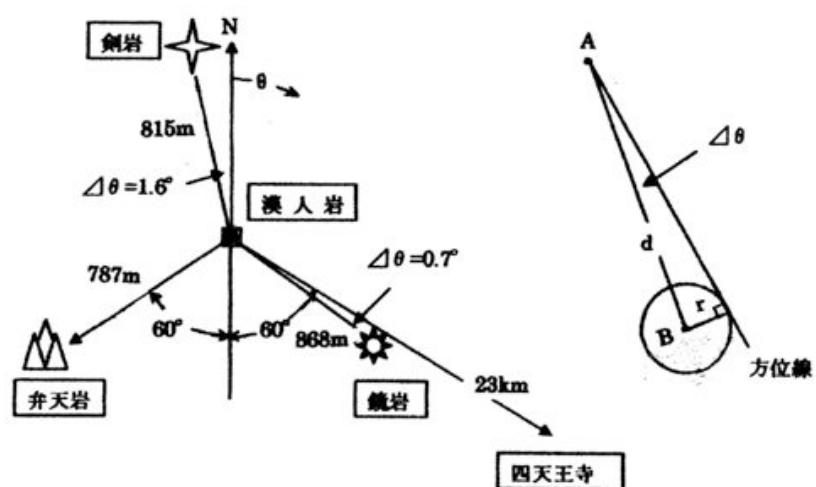


：その頂部（GPS測定点）

△穴が十文字に走っているのが見える。







6 太陽信仰と北辰信仰

(1) 太陽信仰と古事記

太陽信仰は人類共通の原始的普遍的信仰である。古代の人々は朝日と共に起き、活動し、夕日と共に寝る。光と闇を支配する太陽に對し畏敬の念を覚えるのは古代人にとってごく自然である。しかししながら、文明の発達が太陽に対する畏敬の念を薄れさせるのも自然のなりゆきである。

古来より日本は、日の国であることは論をまたない。高い文明を有した渡来人にとって、古事記に表象される日本の太陽信仰は過度なものに映つたであろう。

冬至祭祀は中国でもあつたが文献¹³⁾、これを古事記的に解釈すれば、弁天岩は「天の岩屋戸」を意味する。「天の岩屋戸」神話は、古くは日蝕を指すものといわれていたが、最近では冬至の時期に弱まる太陽の力の復活・再生を意味し、皇室の鎮魂祭の理念と共通するものと言われるようになった。

(文献1-3) 「漢人の磐座」から弁

天岩すなわち天の岩屋戸を望む方
向は、天照大御神（太陽）が隠れ
るところであるから、冬至の日
入り線となる。（図1-7）この時、

前漢鏡は古事記的解釈から八咫鏡
となり、漢人岩から鏡岩を望む方
向は冬至の日の出線となる。鏡岩
が置かれている地域には朝日ヶ丘、
日の出橋の地名もあり昔からこの
地が朝日の名所であったことをう
かがわせる。

尚、中国においては、一般に鏡は
悪鬼を退治し災いを回避するため
の呪術的な道具として使用され、
太陽との結びつきは日本ほど強調
されなかつた。このことから、鏡
の古事記的解釈が不可欠であるこ
とがわかる。

また、冬至の日の出線上には、見
晴らしのきく聖なる地が存在する。
(文献1-3) そしてそれが、四天王
寺である。

葉師寺慎一著 論文「古代日本
における冬至の日の出線（その
2）」（「東アジアの古代文化」

大和書房 第77号1993年秋、

第78号1994年冬）掲載には、
要旨次の如き記事がある。

『古代にあつては、洋の東西を問
わず、月日（暦）を人々に教える
ことは支配者の重要な役目であり、

本でも、暦は支配者（政府・朝廷）
が発行した。古代にあつては、あ
る国の暦を用いることは、その国

の支配に属しているという意味す
ら持つていたのである。おそらく

は農耕が生活の主となつた弥生時
代における各地の支配者たちは、
既に何らかの方法で冬至の日を知

ると同時に、太陽復活を願つて冬
至の日の出を拝んでいたに違ひな
い。』

また、永田久氏著「暦と占いの

科学」（新潮社 1982年刊）

には、冬至に関する要旨次の如き
記事がある。

『中国では立春を年初とする考
え方は漢の時代に始まる。それ以
前は春は冬至からと考えられてい
た。一日の日照時間を基に考える

と、冬至は昼が一年中で最も短く
夜が最も長い。陰気が極まって、
これから陽気が萌すという、陰か
ら陽への一陽來復の日だというわ
けで、冬至から春が始まると考え
られた。しかし、今度は気温を基
に考えると、最も気温の下がる日
は立春で、立春からしだいに暖か
さが増して春になる。こうして、
漢の時代になると、一陽來復の日
として立春が年初と定められるよ
うになつた。つまり、冬至年初暦
と立春年初暦があるわけである。』

つまり、漢の文化圏の人々にと
つて、太陽信仰の古事記的解釈の
受容、立春年初暦から冬至年初暦
への転換は、現実的な対応である
とともに、日本への帰属意識の反
映でもあつた。

奈良県明日香村にある7世紀末
から8世紀初め頃と推定されるキ
トラ古墳・高松塚古墳の天井には
星座が描かれている。この地は、
昔は桧隈（ひのくま）と呼ばれ東
漢氏（やまとのかやうじ）の本拠
地であった。古墳の被葬者は明ら
かでないものの、古墳はあまりに
も中国的であり、渡来人漢氏の影

(2) 北辰信仰

古代中国では、北極星は、北辰
(ほくしん) 辰は龍神を意味す
る）と呼ばれ、あらゆる星が北極
星を中心にして巡ることから、全宇宙
を司る星として崇拜され、天帝の影

化現した姿だと信じられていた。

北辰は、道教の中心的な神である
太一神（たいいつしん）と同一視
された。また、北辰信仰は、北極
星に對するものであるが、広く北
斗七星も「辰」と見なされた。記
紀（古事記・日本書紀）などに最
初に現れる神である天御中主神は、
宇宙の始まりを意味し道教の太一
神に重なるが、その活躍が記載さ
れていないことから、日本古来の
祭祀・信仰に淵源するものではな
く、やはり中国の道教の影響で成
立したとする説が有力である。い
ずれにせよ、記紀は太陽が中心で
星の記述がほとんどないのは明ら
かである。

響を強く感じさせる。そのため、キトラ古墳の天井に描かれた北斗七星は、漢氏の北辰信仰に強い関わり持つものと推定される。

あつた。
(文献16)

天台宗の「台」とは星のことで、上台・中台・下台の三台星（さんたいせい）、三ツ星のことである。

天台宗発祥の地である天台山には、

古来、仏僧・神

仙・道士が多く住んでいた。そ

して、天帝の居所である紫微星（しひせい）を

支える三台星の

真下にある山こそが、この天台

山であるという

伝説があり、地

上で最も神聖な

場所とされている。

天の紫微星は北極星を中心とした星座、上

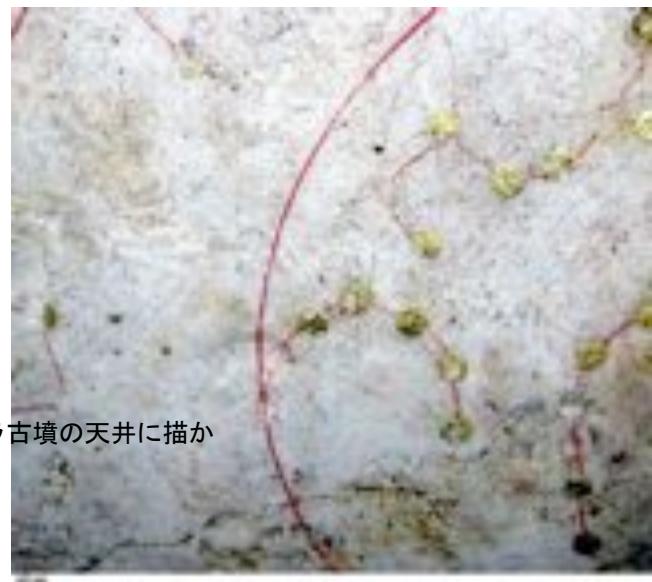


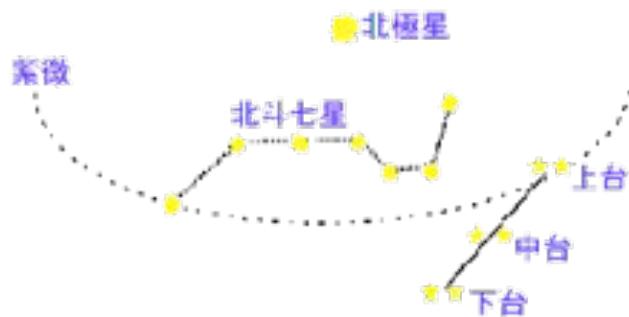
図20 奈良県明日香村のキトラ古墳の天井に描かれた北斗七星
(文献15)

図21 三台星
台・中台・下台の三台星(図21)
は大熊座の一部と推測されている。
また、「天の三台」地の三公」と
いって、地上に(文献)皇帝を補佐する
太尉(軍事)・司徒(教育・文化)・



司空(人民・土地)の3宰相がいるのと同様に、天空には天帝を補佐する三台があるといわれている。つまり、天帝は仏陀あるいは真理・悟りそのものであり、三台こそが仏法を守護して、衆生が真理を知り悟りを開くための教えが天台宗である。図22は、菊に星の天台宗の宗章であり、天帝を補佐する三台がデザインされている。

天台宗は、仏教が道教と習合した好例といえる。



四天王寺の創建者・聖徳太子(574～622年)の著作である『法華義疏』は、中国の梁の光宅寺法雲(467～529年)の『法華義記』をテキストとした注釈書である。

この中で述べられている聖徳太子の法華經觀は、「世界の宗教と經典・總解說」 p109 自由国民社 1979年刊によれば次のように要約される。

『どのような善を行つても、そのすべてが悟りに至る種となるものであるという、仏教は一つという考え方（一乗）にのつとり、この結果、すべての人が永遠なる心の悟りを得ることができるのです

り、釈迦がこの世に生まれた目的はこの經典を説くことについた、と述べて法華經を最高の經典と規定している。』

歴史的には法華經は釈迦入滅後に成立したものであるが、仏教学が今日ほど発達していなかつた当時の中国の仏教者達は、「仏教經典はすべて釈迦が悟りをひらいてから入滅までの説法の記録である」と考えた。この見地から、中國天台宗の開祖智顗（538～597年）は、各經典を釈迦の説法の年代別に分類して、法華經を釈迦が晩年に説いた最高の經典と位置づけた。この解釈は聖徳太子の解釈と軌を一にしており、智顗の天台教學を参考にしたことがうかがえる。のことから、四天王寺（創建593年）は、当時の天台

教学の影響を受けた可能性がおおいに考えられる。

当時の寺には宗派なるものはまだなく、四天王寺が宗派としての天台宗になつたのは、最澄（767～822年）の開宗後、825年の太政官符によつてである。文献18

②聖徳太子と道教

四天王寺には、その創建者である聖徳太子が佩用していたとされる七星劍が奉納されている。七星劍は古代の中国において、國家鎮護・破邪滅敵を目的として造られ、その劍に刻まれた北斗七星は、宇宙の中心である北極星（天帝）を守ることを表していた。中でも北斗七星の柄杓の柄の先端に位置する星「搖光」は「破軍星」とも呼ばれ、この星に向かつて戦いを挑めば負け、この星を背にして戦えば必ず勝利すると言われた。文献19

「私は日の神の御子として、日に向かいて戦うこと良からず。故に、賤しき奴のために痛手を負いぬ。

今より行きめぐりて、背に日を負いて撃たむ。」の記述があり、ここにも北辰信仰の影響がうかがえる。



厩戸皇子（聖徳太子）の師である高句麗僧の惠便と慧慈は、厩戸皇子に仏教のみならず、一般的な学問、朝鮮半島・中国の国家体制や政治など、ありとあらゆるものをお教えた。とくに仏教については、仏教であり道教であるという、いわば道仏混合の思想を教えたといわれる。（文献²²）つまり、四天王寺は仏教寺であると同時に道教寺でもあった。

587年の蘇我馬子と物部守屋の合戦の時、白膠木（ぬりで）で四天王の像を造り戦いの勝利を祈願した厩戸皇子についての日本書紀の記述は別として、厩戸皇子が形勢の不利を開拓するために秘かに祈つたのは北斗七星の「破軍星」ではないだろうか。だから、戦いの勝利後、報恩のために創建された四天王寺に七星剣が奉納されたのではないか。

③四天王寺と難波津
飛鳥時代、大阪湾の海岸線は現在よりも大きく内陸に食い込んで

いたことが知られている。四天王寺は上町（うえまち）台地と呼ばれる半島状の小高い丘の上の難波の宮の一角にあり、「戌」の方位、約700mに難波津を望む位置にある。（図25）

難波津は当時の大陸を結ぶ国際貿易港であった。外来文化の精華ともいえる四天王寺は、渡来人にとって故郷を偲ぶ新たな聖地となつた。そしてこのことが、後に述べるように聖なる三角配置の構想を導き出す契機となつた。

実は、難波津の位置は現在でも定説がなく、諸説を見ると「三津寺町付近」、「天満橋・天神橋付近」、「高麗橋付近」、「上町台地の東方」の四つに分かれる。図2-5は、千田稔氏の著書（文献²³）からの引用であるので、氏の主張する三津寺町説である。

難波津は、河内湖の治水と海上交通の改善を目的とした難波堀江の掘削より誕生したと言われる。

堀江は、現在の大川（天満川）とされ、その完成は500年前後と

する考え方がある。つまり、四天王寺が建てられる100年前である。ちなみに「大阪」とは四天王寺の西大門から難波津へ下る坂の名称で、後に町全体を指すようになったものである。（文献²⁴）

尚、図2-5記載の難波宮は前期難波宮と呼ばれ、645年の大化革新による難波遷都の後、652

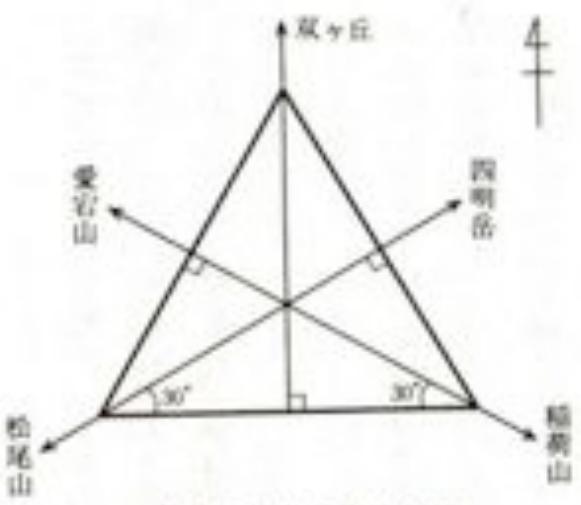
年に完成されたとされる難波長柄豊崎宮（なにわながらとよさきのみや）である。



7 漢人の磐座と秦氏の三柱鳥居

漢人岩は、冬至日の出線と日の入り線の交点にあり、かつ北に北斗の剣岩を望む位置にあることから太陽信仰と北辰信仰の習合の象徴としての磐座の可能性が高いといえる。鏡岩・弁天岩・剣岩のような三角配置は、漢人と並んで有力な渡来氏族である秦氏にも見られる。

秦氏の根拠地である京都太秦に木島（このしま）神社がある。この神社には三柱（みはしら）鳥居と呼ばれる三方から拝むことできる奇妙な鳥居（図26）がある。鳥居の中心には磐座が設けられている。三柱（みはしら）鳥居に関して、「秦氏の研究」大和岩雄著 大和書房 1993年刊 p31 2~324に詳細な記述があり、図27の方位の説明図が掲載されている。



三柱鳥居と山の方位関係



図27において、三角配

置の中央が三柱鳥居であり、それから稻荷山方向が冬至日の出線、松尾山方向が冬至日の入り線である。

そして、北方に秦氏の古墳とされる双ヶ丘（ならびがおか）がある。稻荷山には秦伊呂具（はたのいろぐ）創建の伏見稻荷大社（図28）、松尾山には秦忌寸都理（はたのいみきとり）創建の松尾大社（図29）がある。

ある。

双ヶ丘は秦氏の祖靈の眠る聖地であり、6世紀末から7世紀初頭に築かれたと推定される首長級の大規模な古墳（1号墳）がある。（図30）昭和55年の発掘調査では金環、須恵器、土師器などが出土している。（文献25）



星を示す。	飛鳥時代	現代
星を示す。	角配置の成立過程	も
星を示す。	仰鳥	古がい
星を示す。	鳥	古がい
星を示す。	河	古がい
星を示す。	勝	古がい
星を示す。	秦	古がい
星を示す。	河	古がい
星を示す。	長	古がい
星を示す。	（文献 ²⁸ ）	（文献 ²⁹ ）
星を示す。	でもあつた	は
星を示す。	秦河勝	は
星を示す。	（は	は
星を示す。	たのかわかつ	との説
星を示す。	（文献 ²⁵ ）	
星を示す。	ある。古墳の石室は荒らされて	
星を示す。	たため詳細な原形は不明である	
星を示す。	おそらく古墳の天井にはキトラ	
星を示す。	墳と同じような北斗七星が描か	
星を示す。	ていたと思われる。つまり三柱	
星を示す。	居は、秦氏の太陽信仰と北辰信	
星を示す。	の習合を表すものである。	



四天王寺創建（593年）

---○-----八咫の鏡岩（磐

八咫の鏡岩

ミ人多し

-----○-----弁天岩（磐座）

天の岩屋戸 雨乞い信仰・白山信仰

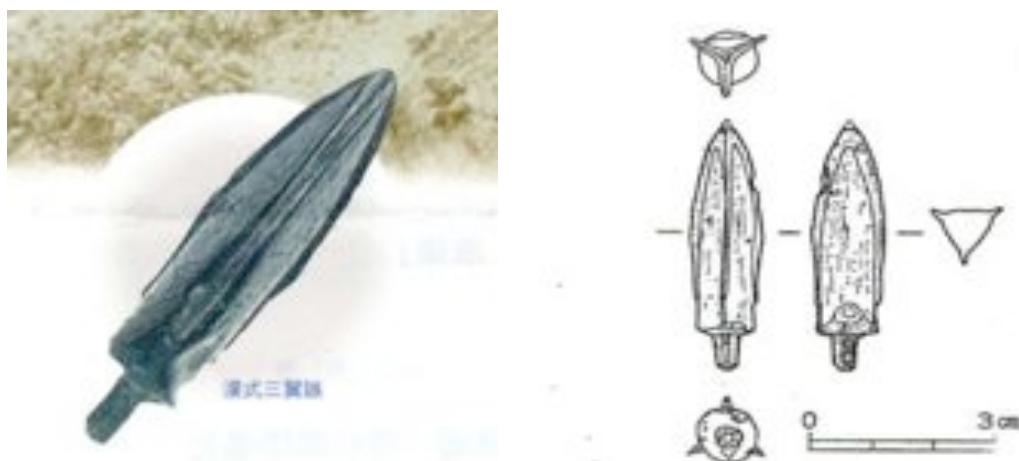
-----○-----平凡な岩

漢人岩 江戸時代の石切り場

-----○-----叢雲の剣岩（磐

-----○-----北斗の剣岩

（注1）会下山遺跡
1956年、芦屋市の山手にあ
たる会下山で、前漢の頃（紀元前
1～2世紀）に製作されたものと
推定される漢式三翼鎌（かんしき
さんよくぞく）が発見された。（図
31）鎌（ぞく）とは「矢じり」
のことであり、中国の戦国・秦・
漢代に盛んに用いられた武器であ
る。出土品は、長さ4.4cm、
幅1.2cmの断面が正三角形の
流線型をした青銅製の矢じりで、
頂点の三方に鋭利な翼をもつてい
る。（文献³）会下山の遺跡は土器
の年代鑑定から、弥生時代後期
たる紀元1世紀頃とされている。
（文献²⁹）



(注2) 前漢樂浪郡

紀元前2世紀の終わり頃、武帝の時代、前漢の勢力は最盛期を迎える朝鮮半島の楽浪郡に進出した。(図32) それともない、日本列島に漢鏡を中心とする漢式青銅器の出土が増加しはじめたことが知られている。^{文獻3} 渡来人とともに、前漢の鏡が朝鮮→北九州→瀬戸内海のルートを通って日本に流入した可能性が考えられる。

ジア(文献26)





空気の澄み切っていた古代、¹⁾ 穏やかな岳の尾根上にある鏡岩からは難波津の港が望め、その上の台地に四天王寺の伽藍が見えたであろう。冬至の日には、朝日が四天王寺を影絵のように浮かび上がらせたことだろう。そして、そのことが弁天岩の冬至の日の入り線を喚起し、漢人岩の発見へと導く。

漢人岩が磐座と成った時、剣岩は「北斗の剣」に転化し、^{2),3)} に聖なる三角配置が完成する。そして漢人岩は、太陽信仰（日本の信仰）と北辰信仰（中国の信仰）を習合し、新天地に生きんとする決意を象徴する帰化人の氏神となつた。

聖なる三角配置の完成時期は四天王寺の創建593年から推定して、7世紀初頭と思われる。これは秦氏の1号墳の古墳の建設時期（文献^{2),5)}に一致する。

8 むすび

磐座は古代史を研究する上で貴重な古代遺跡であり、文化財の規定

に照らし現在放置状態にある鏡岩・剣岩・弁天岩・漢人岩の適切な調査・保護を芦屋市教育委員会にお願いいたします。

了

〈参考文献〉

文献1 「六甲」

竹内靖一著 朋文堂 1933年刊

文献2 「天孫古跡探査要訣」 荒深道斎著 道ひらき本部 1980年刊

文献3 ホームページ「芦屋の生活文化史」第6章 芦屋の史跡
・竈形土器と外来系氏族 ・漢式三翼鍬

<http://www.ashiya-city-library.jp/bunkasi-mokujii.html>

文献4 ひよひよの由治 2006年5月号

文献5 「歴史街道をゆく」
「鏡と剣と玉」高橋健自著

- 富三房 1937年刊
文献 6 ホーメル「前原の史跡」平原遺蹟の内行花文鏡
- <http://www.itokoku.com/maebaru/m01s02.html>
- 文献 7 ホーメル「前漢鏡」
- <http://www.yamatobunko.co.jp/ka/gami/kankyou/list1/list1.htm>
- 文献 8 ホーメル「渡来人」
- <http://www.asuka-tobira.com/toraijin/toraijin.htm>
- 文献 9 「古事記」倉橋憲同校注 三井書店 p30 越辻 1963年刊
文献 10 ホーメル「ヤハタ一ネハマヨウサキ」
- <http://www.asuka-tobira.com/toraijin/toraijin.htm>
- 文献 11 ホーメル「飛島鑑賞館 キシマガゼン」
- <http://www.yamato-bunko.co.jp/ka/gami/kankyou/list1/list1.htm>
- 文献 12 ホーメル「飛島鑑賞館 キシマガゼン」
- <http://www.asuka-tobira.com/toraijin/toraijin.htm>
- 文献 13 「聖徳太子・泉」藥師寺真一著 印刷人出版
- http://www.osaka-art.info-museum.net/special03/special03/spe_tai_list.html
- 文献 14 ホーメル「聖徳太子展」
- <http://www.asahinet.gr.jp/kitor/a/>
- 文献 15 ホーメル「破軍星」
- <http://www.y-morimoto.com/jinja/22/matsuo.html>
- 文献 16 ホーメル「聖徳太子 黒岩重吾著 文春文庫 1990年刊」
- <http://www.asahi-net.or.jp/nr8c-ab/afchnhagunsei.htm>
- 文献 17 ホーメル「仏教近來」黒岩重吾著 プレジモン社 1992年刊
文献 18 ホーメル「天台の教へ」
- <http://www.yamato-bunko.co.jp/ka/gami/kankyou/list1/list1.htm>
- 文献 19 ホーメル「聖徳太子・泉」本町三
- <http://rainy25.exblog.jp/tags/>
- 文献 20 ホーメル「聖徳太子・泉」
- <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%9B%E5%A4%A9%E7%8E%8B%E5%AF%BA>
- 文献 21 ホーメル「聖徳太子・泉」
- <http://www.yamato-bunko.co.jp/ka/gami/kankyou/list1/list1.htm>
- 文献 22 ホーメル「聖徳太子 黒岩重吾著 文春文庫 1990年刊」
- <http://www.yamato-bunko.co.jp/ka/gami/kankyou/list1/list1.htm>
- 文献 23 ホーメル「聖徳太子・泉」千田稔著 小学館 2004年刊
- 文献 24 ホーメル「聖徳太子・泉」
- <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%9B%E5%A4%A9%E7%8E%8B%E5%AF%BA>